

『観無量寿経』の信仰と実践

大正大学 柴田泰山

5世紀初頭に曇良耶舎によって翻訳された『観無量寿経』（以下、『観経』と略称）は、翻訳者の曇良耶舎自身が最も深く研究したと考えられる禅観実践経典として中国に紹介された。しかし翻訳後から禅観実践経典としての側面のみならず、中国の阿弥陀仏信仰において中核をなす経典として特に隋代から唐代にかけて『観経』解釈をめぐるさまざまな議論が展開し、また宋代になって大蔵経として活字化され、さらに高麗版に至るまで、実に多様な受容の過程を見て取ることができる。そこで本発表では「『観無量寿経』の信仰と実践」と題して『観経』を取り上げ、中国仏教における『観経』の受容と解釈の歴史を整理することで、中国仏教内における一経典の受容史から読み取ることができる「仏説の受け止め方」と「仏説の具体的実践」について考察を試みたい。

周知のように『観経』を最初に引用した文献は北魏の曇鸞の『往生論註』であると考えられるが、北齊になると金石文中に「阿弥陀仏」の用例が増加し、また小南海石窟中窟内の西壁仏像の存在などがすでに多くの先行研究などによって指摘されている。特に小南海石窟中窟は『涅槃経』と『観経』との密接な関わりがあることを示唆する貴重な史料であること、さらには靈裕や慧遠といった地論南道派の碩学とも関与することが指摘されている。これら先行研究を整理した上で、今一度、禅観実践経典としての『観経』の側面を見直し、『観経』所説の十六観が四念処の一環として受容されていた理由を考察したい。また安道壹により崗山摩崖仏経として『観経』が刻経された理由を考察することで、『観経』と仏名との関わりも指摘できるものとする。

加えて慧遠から善導を経て龍興に至るまでの浄土教の教理史における『観経』の解釈の変遷、往生浄土を目的とした諸実践行と『観経』との関わり、さらには善導や法照による『観経』に関連する礼讃文の作成などの概観を通じて、禅観実践経典としての側面と、阿弥陀仏信仰経典との側面が、どのようにして一経典において内包されてきたかということ整理するとともに、特に高麗版のみに顕著に見受けられる経文の異同の意味を考察することで、『観経』がどのように受容され、そして具体的にどのように実践されていったかということを指摘したい。併せて経典の受容そのものが経典解釈と経典実践であり、また経典受容の歴史がそのまま経典の内容を変化させていく過程でもあることについて指摘を試みたい。〈キーワード：観経、経典受容、経典実践〉